TOKUMA NOVELS

発行者　徳間康快
発行所　徳間書店
東京都港区新橋四ノ一〇　郵便番号一〇五
電話四三三・六二三一　振替東京四―四四三九二

高木彬光
呪縛の家

Akimitsu Takagi
カバー装幀　鈴木　彰＋集合ｄｅｎ
本文挿画　小松久子
落丁・乱丁はおとりかえいたします

79E10e

長篇本格推理

呪縛の家

高木彬光

徳間書店

TOKUMA NOVELS

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

呪縛の家　目次

丘の上の予言者……9
水に浮かびて殺さるべし……28
ラプラスの魔……44
悪魔の弟子……60
イスカリオテのユダ……76
恐ろしき毒……91
火に包まれて殺さるべし……108
神秘宗教釈義……124

地底の巫女(みこ)……140
静かなる決闘……156
地に埋もれて殺さるべし……173
狂える人びと……187
吸血鬼……203
未完成交響楽……216
裁き得ぬ罪人……231

丘の上の予言者

血ぬられたような入り日の光を浴びて、奥武蔵野の紅葉の色も、きょうはひとしお鮮やかだった。

風こそないが、身にしみるきびしい寒さ。

かさこそと音をたててはは、道の辺の銀杏の木々の梢から風雨にきずつきはてた病葉が三つ四つ二つ——金色の胡蝶のような可憐な羽を、そよ風にひるがえしつつ、舞い降りてくる。

楢の林を横切って、細い道はまた左に折れて樺の林の中へ、枯れ落ちた葉の山を踏む私の足音も、深々と反響もなく、消え去っていき、あたりのしじまを破るのは、時ならぬ人の気配におどろいて飛びあがる鴉の羽音だけだった。

どうしてこんな近道を、こともあろうに選んでしまったのだろう——。

私は自分自身の軽率が、つい悔やまれて舌打ちをしたいくらいだったが……。

浅川の駅から道を聞いたときには、近道はこの野の中の細道だと言われたので、ついこちらへとやってきてしまったが、初めての土地で案内する者もなく、ただひとり野の中を歩きつづけているというのは、やはりいくらか心もとない。

それにもまして、私を待つこの家の様子には、かんたんな手紙の一字一句にも、どこかしら私の心の中に、食い入ってやまないものがあったのだから。

しかしせっかく、電報を打って着くのを通知したのに、駅までぐらい出迎えに来てくれたところでよさそうなのに。あの速達の調子には、強く私の助けを求める、有無を言わせぬ哀願の響きが感じられたのに……。

こう思い、考えながら、ゆるやかな斜面をのぼって、道は小高い丘の上へと……そのときだった。がさがさとかたわらの、熊笹の茂みを分けて、私の前に姿をあ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

らわした恐ろしい男があった。
年は三十五、六だろうか。皮のジャンパーに兵隊靴、紅葉のついた柿の枝を、左手に下げ、右手に持った熟柿を一口がぶりとかじりながら、射つくすような眼差しを、私の総身に浴びせかけたのだ。
その眼の色に、まず私は愕然とした。爛々と光を放つ、狂えるようなその瞳。痩せ落ちた頬、青黒い顔。女のように長く伸ばして切り落とした総髪。鋭敏な頭脳を誇る人間か発狂一歩寸前に示す、憑かれたようなその表情——。
この男は決して、一介の農夫ではない。何か変わった経歴を背後に持った人間に違いあるまい。たとえいまでは、半ばは生ける屍となりはててていたとしても……。
私はすぐこれだけのことを感じた。だが私にこれという危害を加える意志があろうとも思われないし、それならば、いまのこの孤独から解放されるというだけでも、私にはありがたいことだった。

「八坂村へは、この道を行けばよいのですか」
「そうじゃ、あと五町ほどお行きなされ、山ふところの静かな村じゃが、どなたを訪ねておいでなさる」
低くかすれた、地底から響いてくると思われるほど、反響のない声だった。
「紅霊教の本山を訪ねて行くのですが……」
その男の眼にはふしぎな光が宿った。私はまだこのような眼を見たことがない。強いて私の記憶の中にその例を求めるならば、中国の戦線で、銃を捨てて敵に投降しようとして発見され、軍法会議の結果、世を呪い戦を呪い、祖国の前途すらも呪って銃殺された、一兵士のいまわの眼差しが、いくらかこれに近いものだったろうか。
「お行きなさるか。あの呪われた人びとの住む死の家へ、何を目当てにおいでなさるか」
「その呪いとは……」
「いまにわかろう。あの家の棟の真下に一夜を過ごしさえすれば、それは誰にもわかること。おまえさんで

も二日もすれば、わななきながら逃げださずにはおられぬじゃろう。おとなしく、すぐこの場から帰るのが、賢明な人間のすることというものじゃよ」
「しかし僕には、ここから引き返すことはできませんね。僕の旧友が、僕の来るのを待っているのです。恐ろしい犯罪がおこる予感がしてならないが、ぜひ君の力を貸してもらいたい。こういってきた友だちの言葉を、無にすることはできませんから」
「フフフ……」
私はかすかな彼の笑いを聞いた。
「おまえさん、あの呪われた人びとに力を貸そうとお言いなさるか。およしなされよ。どうあがいても、人間の力には及ばないことだ。あの人間どもは、悪業の積もりがついに実を結び、いまその罰を受けねばならぬ」
「あなたこそ、すると、どういう人なのですか」
「以前は悪魔の弟子の一人。いまは自分の誤りを知って、正しい悟りの道を得たが……あの家に行くくらいなら、それよりも、わしのところへ、道を求めてこられるほうがよかろうが——」
「あいにく僕は、道を求めてこんなところへやって来たのではありませんから。失礼」
踵をかえし、立ち去ろうとした私に、襟をつかんで引きもどすような、冷たい低い声がおそいかかった。
「悪魔に伝言なさるがよい。今宵、汝の娘は一人、水に浮かびて殺さるべしと、これこそ神のお告げなのじゃ。お忘れなさるなよ」
彼はいったい、正気なのか、狂人なのか——。
その刹那、氷のような戦慄がたちまち私の背筋をよこぎった。私は自分の背から追いかけてくる、眼に見えぬ幽鬼の足どりを感じて、われ知らず走りだしていたのだった。だが半町ほど走りすぎてからふり返っても、彼は以前の位置にそのまま立ち止まっていた。その手に持った食いさしの柿の実が、人の血のりを丸めて球にしたように、私には思われてならなかった。
そこはちょうど、丘のいただき——あわい冷たい夕

霧が低い盆地をおおっていた。その中に五百に近い家家が、安らかに憩い、静かに眠っている……。

大都市の美と力とは、自らその中にはいりこみ、高楼を望み雑踏にのまれ、ゆきかう人の一人となって、初めて強く実感される。

だがこのような村落は、一望にして俯瞰すべきもの、はるかに彼方に霧のベールをとおして望み見るべきもの。ひとたび足をその中に踏み入れては、人は冷たい幻滅と悔恨とに、激しく胸を嚙まれつつ、逃げださずにはおられないかもしれぬ。

私はいまの怪しい男のことも忘れはて、はずんだ息をととのえながら、しばらくそこに立ちつづけたのだった。

眼の下に横たわる、茅葺きの家々からは、紫色の夕餉の煙が立ちのぼり、その中にひときわめだつ、城郭に似た大屋根の上にそびえる、尖塔の窓のガラスの一つ一つが、きらきらと火のような残光を、こちらへと投げかけていたのだった。

これが私の目的の家、紅霊教の発祥の地、「呪縛の家」だったのである。

私は足を早めて、丘の斜面を下っていった。低い軒端の牛の声、乳を求めて泣きたてる赤子の声、ささやかな川のせせらぎ。それにまじって、耳を圧する太鼓の響き、澄んだ鐘の音、鈍い銅鑼……。

紅霊教の夕べの祈禱が始まったのだった。

読者諸君よ。私の新しい冒険は、このようにして、その幕をあげたのである……。

私の処女作『刺青殺人事件』をお読みになった諸君は、私がその中でそれとなく予告した「呪縛の家」の名を、おそらく記憶しておられるだろう。

名探偵と謳われた私の畏友、神津恭介が、登場以来解決してきた事件の数は、すでに十指を越えている。世にも稀なる彼の英知の閃くところ、どんな難問怪事件でも、なんの苦もなく解決されると思っていたが……。

しかしこの「呪縛の家」に居を占める、紅霊教の教祖、卜部舜斎と、その三人の孫娘をめぐってくりひろげられた連続殺人事件――それはなんと恐ろしい、得体のしれぬぶきみなものだったろうか。

この神秘宗教の衣にかくれた殺人鬼と、神津恭介の推理の死闘は、まもなく諸君の眼前に展開される。

殺人のおこる寸前、必ずおこる怪しい予言。それはみな事実となってあらわれた――。

たとえてみれば、この物語、開巻劈頭に私の聞いたあの言葉、

――水に浮かびて殺さるべし――

この一語こそ、その夜この家におこった恐ろしい殺人事件、長女澄子の怪死を、いみじくも言いあらわしていたではないか。

だが待ちたまえ。私はこの殺人事件の本筋にはいる前に、この神秘宗教、紅霊教の歴史について、いくらか筆を費やさねばならないのだ。

終戦後、それまではきびしかった弾圧の手がゆるむとともに、全国各地には、数知れぬ疑似宗教が輩出した。

双葉山、呉清源の二名士を傘下に擁して、報道界を彩った璽光尊は、その常軌を逸した無軌道さに、われわれを苦笑させた。それは当時のすさみきった人心に、一抹の清涼剤の役を果たしたともいえる。

それに対して、この紅霊教の存在は、璽光尊にも劣らない影響を、一部の人士に与えていた。

その発祥は、遠くいまを去る、三十年のむかしにさかのぼる。

当時この八坂村の水呑百姓だった卜部舜作は、夢にふしぎな神託を得た。

身に神々しい白衣をまとい、眼にもまばゆい光を放ち、髪をみずらに結いあげた、絶世の美女が一人、彼の夢枕に立って、このように口走ったという――。

「よいかな。よいかな。われは天照皇大神なるぞ。ゆめゆめ疑うことなかれ。われ、なんじの信仰をめで、なんじにわれの力を託さん。この汚れはてたる濁世に、

光の道を開くべし。なんじの行くところ、われもまた行く。なんじの言うところ、われもまた言う。もろもろの悪を討ち、醜魂をはらいて、この世に神の国をば開け……」

これはそのまま浄書されて、紅霊教の神典として、厳重に保存されているといわれる。

当時三十三歳だった彼は、すぐその日から熱烈な運動を開始したのだ。

天照皇大神のことは、真偽も保証できないが、何かふしぎな力が彼を駆りたてたのか、彼にはその後、常識で想像できぬ透視力が備わってきた。

ト部の家の舜さんは、ほんとに、よう占いをしなはるぞや——。

こないだも、家の失せ物を、ようあてなすって——。

いつかこうした囁きが、村人の口から口へとかわされていったのだ。

たしかに彼は、そのときは人間離れのした力に憑かれたらしい。失せ物や縁談などはおろかのこと、当人がどんなことを考えたのか、相手の心の中までも、ぴたりぴたりと言いあてたということだった。

このことは、たちまちにして、近郷の話題にのぼった。彼を訪ねて、身の上の相談に来る者の足もとだえず、あげくのはては、彼をかついで、一儲けする魂胆の山師連が、彼の門前市をなす始末だった。

彼としても、あの神託はたえず頭を離れなかった。もろもろの悪を討ち、醜魂をはらうそのために、彼は決然蹶起した。どんな黒幕と結託したか——、私も残念ながらそこまでは覚えていない。

しかしたちまち、彼の生まれた陋屋は、堂々たる紅霊教の本山となり、東京の代々木には、大邸宅の門前に、

「紅霊教関東総支部」

という大きな看板が掲げられ、通行人を威圧していたことは、私も子供心によく覚えていた。

組織の力というのは恐ろしいものである。彼のこの霊感は、それほど長くつづかなかった。だがしかし、無知蒙昧の大衆は、予言など実はどうでもよいのであ

った。彼らはたえず、何か自分らのすがりつくものを求めてやまぬ。

最初は、手に載せた品物を指さすように、はっきりとすべてのことを言いきった彼の言葉も、日を追ってぼんやりとした、あいまいな表現にぼかされたのだ。しかし信徒は、彼の言葉が神がかるほど、ありがたがって彼をあがめた。

そしてこの宗教の信条である「紅き真心」——これは決して、共産思想ではなく、国旗の日の丸か、血の色をかたどったものだろう——をもって、世界を光被しようと勢いだったのである。

卜部舜作は、舜斎と名を改めて、軍閥の走狗となった。

私も高校当時、彼の著作を見たことがある。それは、かつての戦時中の報道部長、H大佐の演説の原本かと思われたほど……日本列島を拡大すればそのままに、全世界となってしまう。濠州は四国、アフリカは九州、米大陸は……あまりばかげてそこまでは覚えていない。要するにそれは、日本の侵略思想の象徴だった。

したがって、戦時中、彼の力はまさに日の出の勢いだった。

戦の前途を占うために、軍令部から幾人という高官が、たえず車を駆ったとか。日米戦の開戦も彼の言葉によったとか……そのような噂まで伝えられたが、堂堂と彼は新聞紙上にまで、南京の落ちる日を予言し、マニラ陥落の日を言いあて、しかも正しく言いあてた。

これが最後に、彼を没落させたのだった。

あの若き日の霊感が、ふたたび彼を訪れたのか。そしてふたたび、彼を見捨てて消え失せたのか。

彼はまさしく負け馬に賭けたのだった。戦局がしだいに不利に陥っても、彼の言葉は軍の言葉に輪をかけて、いよいよ強く高ぶった。

そして今度は、次から次へ、その予言は見事にはずれていった。

東京に空襲なしと言いきったが、東京はなかば廃墟と化した。代々木の紅霊教の広壮な大建築も、炎とな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton